opusdei.org

年間第6週・金曜日 50謙遜

年間第6週・金曜日 50 謙遜 一神を頼りにする。 — 利己 主義と高慢。 — 謙遜を深め るために。

2024/04/09

年間第6週・金曜日

50 謙遜

- 一神を頼りにする。
- 一利己主義と高慢。

- 謙遜を深めるために。

50.1神を信頼する

創世記で1、人間がバベルの町と塔 を建てる驚くべき事業をどのように 始めたかがわかります。それは、人 間の連帯の象徴であり、全人類を統 一するための中心となるはずのもの でした。しかし、その事業は決して 完成されることはなく、人間はかつ てないほど互いに仲たがいをしたの です。もはや互いの話していること が分からず、一致していくこともで きませんでした。この意欲的な事業 はなぜ失敗したのでしょうか? 建造 者の労力はなぜ無駄になったので しょうか? その失敗は、自分たちの 手でやり遂げた仕事だけを一致のし るしであり保証であると考えて、神 (主) のみ業を忘れてしまったから です²。 聖書のこの箇所を解説し て、教皇ヨハネ・パウロ二世は、正 確には神に反していなくても、神の

ようになるというそそのかしに騙されて裏切り、堕落した人祖の罪と、神なしの権威を振るい有能であろうとした人々の罪を関連づけています。。これはすべての罪の根源にある高慢の罪で、様々な違った方法で現れます。

バベルの塔を建てた人々のように、 人間の行いから神を除外する態度 は、単に神のことを考えない態度、 神に対する無関心として描かれてい ます。しかし、神に対抗することと 無関心、いずれも神との関係が乱暴 にも断ち切られています4。

私たちは、熱心に計画を立てたり、 目標に達成するために働いたりして いることには、どんなことにも神を 入れることをいつも思い出すべい す。なぜなら、あらゆる男女の心に は、高慢によって自分自身を惑わす 傾向が潜んでいるので、生涯のまさ に最後の瞬間まで正しく歩み続けて

バベルの塔を建てた人たちのような 高慢な人々は、自分の力だけに頼る 傾向があり、自分の能力とやり遂げ られそうな成功以外は考えていませ ん。結果的に、彼らの建てた建造物 の基礎は不安定になり、現実的には 決してうまくスタートをきることが ないのです。

実際に、高慢な人は、神を考慮する 値打ちがないものとして閉め出しま す。決して神の助けを求めず、神に 感謝することがありません。このよ うな人は、神が霊魂に力と光を頻繁 に注いでくださるのは、霊的指導か らの支えや助言であるにもかかわら ず、その必要性さえ感じることが全 くありません。高慢な人は自分を無 力で頼りないものとはみなさず、自 力本願で強く、大きなことができる と考えています。このため、彼は軽 率で恥知らずで、永遠の救いを危う くする罪の機会を避けることができ ないのです。使徒聖ヤコブは、「神 は高慢な者を敵とし、謙遜な者に恵 みをお与えになる」⁵と指摘してい ます。私たちは繰り返し次のように 教えられます。高慢は聖性の大敵で す。なぜなら、高慢は大変多くの罪 を生み、神のみ前で数えきれないほ ど多くの恩恵と功徳を霊魂から奪い 取ってしまうからです。 友情と剛

毅そして真の幸福にとっても大きな 敵です。

私たちの計画から神を除外すること などないようにしましょう。神はぶらにしましてする神はでいたのをでいたがでいたがででいたがででいたがででいたがででいたがででいたがででは、本たちがでは、からましたがです。ではないではないではないがではないがではでいないではないがです。 私たちが直面ではいいです。ないではないです。 などにないないではいいではいいでではないがでがでいますがではでいたがではいいでではいいです。 などにないないではいいです。

50.2高慢と利己主義

謙遜は、すべての徳の土台であり、 キリスト教的生活を生きるための必 要な支えになります。この徳は、高 慢とそれに伴う避けることのできな い利己主義に対立する徳です。自己 中心の人は自らをすべての事柄の基

準にします。その結果、アウグスチ ヌスがすべての倫理的逸脱の元であ る神を軽蔑する自己愛⁸とみなした 精神的な態度をさらに強めてしまい ます。自己本位の人々はどのように 愛するかが分からないのです。彼ら はいつも自己愛だけしか理解できな いので、自分が手に入れられるもの を一生懸命に手に入れようとしま す。寛大であることや感謝などでき ず、自らを与えることがあれば、そ れは長い目で見て、与えることが彼 らの利益になりそうだと計算してい るからです。私利私欲が寛大な行為 の背後に潜んでいるのです。彼らに は見返りがなくても与えることを理 解することができません。基本的に は利己主義者は他のすべての人々を 軽蔑します。高慢は利己主義の真の 原因です。この悪徳の中にすべての 悪の元が見いだせます⁹。すべてを 個人的な利益の視点から見ることに あると言える利己主義と、自分の素 質を過大評価する偽りであり、みだ

りに自らの名声を望む高慢とは、しばしば混同されます。これらの内にすべての罪が生まれる根本的な混乱や無秩序があると言えます。「すべての罪は高慢が根っこにあり」 $\frac{10}{10}$ 、「人の高慢の始まりは、神から離れる」 $\frac{11}{10}$ ことなのです。

神の恩恵の助けによって、私たちはいつも油断なく警戒し、様々な形を とるあらゆる高慢を攻撃するように 備えていなければなりません。虚栄 心と自慢の徴候と共に、自分がすべ てのものの中心にいて、あらゆる状 況を自分の思うように動かすという でっち上げを作り上げる傾向をもつ 想像力を警戒しなければなりませ ん。他人を軽蔑することを見張り、 すべての嘲り、いやみ、他の人を不 利に判断するどんな傾向も避ける必 要があります。他人の会話に口を挟 み、いつも一番良く知り、決定的な 言葉を述べなくては気がすまない 人々の中に数えられるようなことが あってはなりません。高慢な人は不 満をもつ傾向が非常に強いです。彼 らが本当に関心を持つことは自分以 外に何もないから、自分のことと自 分のしていること以外については何 も話すことができないのです。

このような状況に打ち負かされないように、主に依り頼まなければなりません。高慢ほど悪質で愚かな罪はない。多くの幻影で人をさいなむ、

高慢にとりつかれた人は外見のみを 飾りたて虚しさで自らを満たする です。ちょうど、お伽噺に登場する あのうぬぼれに溺れて裂けよせの お腹を膨らませ続けた蛙の に。人間的にも高慢は嫌ない。自分を誰よりも優れてい、自分を す。人は絶えず他人を軽蔑し、そん よりのことしか考えません。そんよう が13。

主よ、あなたの愛すべきみ顔を見ず、周囲の人々の多くの徳と善良な特質を見ない、あの恥ずべき精神状態に決して私を陥らせないでください。

50.3 謙遜をどのように育てるか

キリスト教的生活を確立したいと思うなら、行いによって自己愛を根こそぎにしようとする一方で、主にそうしてくださるように嘆願しながら、言い訳をしたりせず、失敗して

もそれに負けずに立ち向かいなが ら、自分自身の内に謙遜の徳を育に なければなりません。謙遜は非常に 多くの実りをもたらし、他のよりをもたらし、 の徳と関連しています。特に、 、 剛毅、純潔、誠実、単純、は柔 和、寛大などです。謙遜でなければ、 でなります。謙遜でなければ、 愛徳の実行が難しくなります。

もっと謙遜になるために、私たち は、欠点を克服するために戦ってい ても、勝利が得にくい事や、日毎に 自分の弱さを思い出すという謙遜 を、受け入れる覚悟がなければなり ません。良心の糾明をする時、特に もっと徹底して糾明ができる時に は、次のように問いかけましょう。 「これほど頻繁に神を侮辱したこと に対して感じる悲しみを、償いとし て主に捧げただろうか。徳の道にこ んなにわずかしか進歩しない自分を 思って、心の中で赤面するような恥 ずかしさと屈辱を主にお捧げしただろうか」 14 。それから、他の人々から与えられる屈辱、予期しなかった侮辱や正真正銘の不当な屈辱、これらをキリストとともに忍んだだろうか 15 。

もし私たちが主ご自身の謙遜である 固い岩を探して、その上に自分の謙 遜を築こうとしているなら、毎日数 えきれないほどその機会を見出すこ とは確かです。本当に必要な時だけ 自分のことを話すように、その時で さえそれほど多く語らないように努 めることができます。他の人がして くれたちょっとした親切を有難く思 うことができます。自分には受ける 価値が何もないことを心に留めて、 数えられないほどの恩恵を神に感謝 することができます。一日をとおし て接する人々にとって世の中をさら に喜ばしいものにするよう決意する ことができます。私たちの周りに循 環する無益な考えについてはどうで

しょうか? それは始めから断つこと ができます。家庭や仕事場あるいは 私たちがいるところならどこでも、 手伝う機会はどんなものでも逃さな いようにしなければなりません。あ まりに自分で頑張りすぎるかわり に、助けてもらうことや忠告をもら うようにすることもできます。も し、自分に非常に誠実であれば、私 たちを謙遜にしてくれ、時に人々の ゆるしを願わなければならない罪と 失敗をうまく言い逃れるために、言 い訳を探すことをしないように主に 願うでしょう。これらすべては、神 の助けと霊的指導の助けによって実 践します。それらはイエスに出会 う、もう一つの道(方法)です。

キリストを見つめていれば、誤りを 認め、正しい道を歩み始めるのに十 分な謙遜を持つことができます。知 識の不足や物事の変化、あるいは、 単に問題の重要性を正しく認識でき なかったことによる大失敗もあります。

聖母の生活を学べば、この徳について完全に教われます。神は、聖母のために偉大な事を行われました。なせなら、主は、そのはしための謙ささを省みてくださった。本物のの謙なこそあらゆる徳にとって超自然的深くあることが、日毎により深なも、聖母に話してみなさい。

¹ 創世記 11・1-9

² 聖ヨハネ・パウロ二世 使徒的勧告 『和解とゆるし』13

³ 創世記 3・5 参照

⁴ 聖ヨハネ・パウロ二世 使徒的勧告 『和解とゆるし』14

⁵ ヤコブ4・6

- ⁶ R. Garrigou Lagrange, The Three Ages of the Interior Life, Vol 1, pp 4 4 5 – 6 参照
- 7 聖ヨハネ・クリゾストモ, Homilies on the First Epistle to the Corinthians, 8
- ⁸ 聖アウグスティヌス,『神の国』第 14巻,28章
- ⁹ 聖トマス、『神学大全』、I-II, 177.4c
- __ シラ書10・12
- 11 シラ書10・14
- $\frac{12}{5}$ シエナの聖カタリナ, Dialogue, $\frac{12}{5}$ 1
- $\frac{13}{2}$ 聖ホセマリア・エスクリバー 『神の朋友』 1 0 0
- $^{14}_{_}$ 聖ホセマリア・エスクリバー, 『鍛』 $1\,5\,3$

¹⁵ 聖ホセマリア・エスクリバー 『道』594 参照

¹⁶ 聖ホセマリア・エスクリバー 『拓』 2 8 9

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/TO-VI-kin/ (2025/12/11)